



サンスクリット語の今

「あの家の旦那は荳蔻家だね。…」ありがちな台詞だが、旦那の語源を尊重すれば、矛盾極まりないことになる。なぜなら、「旦那」とは古代インドのサンスクリット語 *dāna* (布施) に由来し、惜しみなく何でも他者に施しを与える者 (*dāna-pati*) なのだから。

仏典がサンスクリット語から漢訳される際に音で置き換えられた、こうした音写語の類は、漢字文化圏の我が国に意外と多く残存している。奈落 (*naraka*: 地獄)、刹那 (*kṣaṇa*: 瞬間)、瓦 (*kapāla*: 罽𦰩), …。

それらのうち、仏舎利の「舎利」は遺骨という意味でよく知られているかもしれないが、*śārīra* という原語の基本的意味は「身体」である。だから、にぎり寿司は上だけではなく下も実は身だったわけだ。

語彙レベルでは、こうして私たちの身近にも存在するサンスクリット語であるが、本家インドではどうだろうか。もちろん、系統を同じくする近代インド・アーリヤ諸語には語彙レベルで同様の残存が見られる。例えば、ヒンディー語でも地獄は '*naraka* (ナラク)' だ。

文法体系は全く異にしている、特別に教育を受けなければインド人でも理解できないほどのサンスクリット語ではあるが、だからといって、決して死語ではない。

筆者が留学した大学の、年1回盛大に催されるサンスクリット記念日の講演会は、広い講堂に満員の人を集め、司会も講演もすべてサンスクリット語で進められて



インドの伝統的な結婚式の一場面：新郎新婦のわきに司祭僧がいる。

いた。

また、結婚式や長寿の祝祭などのいわゆる通過儀礼や各種の祭礼を行う際には、司祭僧によってサンスクリット語の祝詞が読誦されるのが必須である。贅を尽くした結婚式などは3日間も続き、式次第のそれぞれの場面で異なる長大な祝詞が朗詠されることになる。

そうした司祭僧たちのみならず、儀礼に携わらない多くの教派・学派に属する学僧たちも、大学で教養として学習するのは全く異なる方法で、そうした文言を古代より連綿と伝承してきた。師のもとに弟子入りし、師が暗記している長大なテキストを書写することなく耳で聴き、完全に記憶していくのだ。昨今注目のIT分野風にいえば、一体何メガ・バイト分の記憶容量になるのだろうか。流行のインド式算術も、そうして伝承されてきた1つの分野にほかならない。

あまりにも情報過多で記憶容量に残量がないから、というのは筆者が常套句じょうとうくとしていた負け惜しみである。

表紙写真について

ベッツィー・ロス旗

バトラー後藤裕子 Yuko Goto Butler (ペンシルバニア大学)

アメリカでは、国民の祝日でなくても、普段から国旗を掲げている家庭が多い。アメリカの国旗といえば、青地に50の州を表す50個の白い星と、独立を果たした13の植民地を赤白のストライプで表した星条旗がお馴染みだろう。しかし、1777年に正式に作られた最初の国旗では、独立を宣言した13の植民地、つまり13の邦を表す白い星が、青地に円状に並んでいた。この国旗は、旗を縫ったとされる女性の名にちなんで「ベッツィー・ロス旗 (Betsy Ross Flag)」と呼ばれ

ている。13本の赤白のストライプは今も同じだが、星の数は州の数が増えるにしたがって少しずつ変化し、現在のデザインに至っている。

アメリカ独立の地であるペンシルバニア州フィラデルフィアでは、1777年の独立宣言採択とほぼ同時に作られた、この最初の国旗を掲げている家庭が少なくない。ベッツィー・ロス旗が風に泳ぐ町並みを歩いていると、アメリカ合衆国発祥の地としての、住民の誇りを感じることができる。

フィラデルフィアにはこの他にも、

歴史を感じさせるものがあちこちにちらばっている。例えば、古い家々の壁に時々見かける木の形のマークは、アメリカ初の火災保険のしるしであるし、石畳の道にところどころ点状の小さな石は、馬車から降りるときにご婦人が足をかけたものである。また、古い家を購入すると、代々の所有者の権利書の記録が付いてくることがあるが、その記録を見ると、18世紀頃の取引はボンドで行われている。まだアメリカが英国の植民地だった頃の名残である。

